

13. いまも残る偏見差別

さいごに、近年になっても見られた、ハンセン病患者・元患者に対する差別と偏見にまつわる体験談を、以下に示したい。

ある入所者（男性、1944年多磨全生園に入所）は、少なくとも、つい近年まで、療養所を一步外へ出ると、ハンセン病者にたいするぬきがたい偏見と差別的態度が日常的場面の随所にみられたことについて、つぎのように語った。

園でもって、いちいち出入りを咎めるっていうことがなくなっても、それから先ね、たとえば駅。券売機で切符買ったりだとかなるまでは、お金を出札で払うとね、清瀬あたりの意地の悪いのはね、小さな窓口の少し内側のところへ切符を置くんですよ。そうするとここがつかえて取れない人がいるんですよ。そういう人はもうね、お金払ったらすぐね、競輪場で使う赤鉛筆、あれなめてね、これでもって搔き出すのね。で、わたしたちはさっき言った、〔昭和〕39年から、全患協のニュースね、あの原稿を代々木まで持ってったり。それから、校正のときにね、代々木まで行くんですよ。その行き帰りに、あすこをどうしても通過するわけですよ。それで、改札係がね、切符を取らないんですよ。あるいは、爪の先で取ってね、足下へ落とすんですよ。「この野郎」って……。そのうちにもう、清瀬〔駅を〕出るときにはね、切符は渡さないでそのまま持ってきちゃいました。机の引出しの中へね、清瀬の切符がだいぶ溜まっていたね。それで、今度は、楽になったでしょ。直接人から人へ、切符切らないし。あそこ〔＝自動改札機〕へ、こう、通す。ああいうふうになってしまったからね、そういうことをいまはいちいち考えないけれども、むかしはもうね、いまでもテレビ見てもね、テレビでもって、お金やりとりする、品物を店で買って。それで、あ、お金どうやって取るのか。自分が受け取るような感じ、必ずもちますよね。ほんとにね、芯までそのことがコンプレックスとなっているんだろうっていうふうに思うんですけどもね。乗り物はそれでもってだいぶ楽になりましたよね。

それから、商店やなんかでもね、ここは清瀬が近いから清瀬の店を使うんですけども、清瀬でもね、嫌う店があって。だから、あの店は行かないほうがいいぞって言ってね。行かないように、みんな、気をつけるんですよ。

予防法廃止される以前はね、つい最近までだったら、けっこう、バスレクで出歩くようになったでしょ。そうすると、帰りはどっか近くへ来て、夕御飯食べるでしょう。廃止される以前まではね、こっちのほうの食堂だとかね、「なんで、いつまで待たせるんだ」と。大勢で行くもんで。それで、酔っ払った勢いでね、「うまくもない。どうしようもない、これは」とかね、つい、言うやつがいる。そうすると、そういう機会をとらえてね、「もう、うちへは来てくれなくていいです」って断われた店が、このところだと3軒ぐらいあったみたいですよ。

で、最近は、スーパーはそういう教育をしてるみたい。手をね、こういうふうに出すでしょ。そうするとこういうところから小銭が漏る場合があるのね。それだもんでね、むこうでもって、手へ乗せてくれるときにね、もう一方の手でこうやって受けてくれるのね。それで、「またおいでください」ってね。ああいう対応の仕方見てるとね、店

員に対する教育っていうの、その点でしっかりしてるんだなっていうふうに思います。スーパーは例外なしに、みんな、このごろはそういうふうには不快な感じを与えないようになりました。だから、うんと手の悪い人はね、はじめっから財布渡して、財布から取ってもらう。だから、一緒に行くと、多少わたしなんか軽いと、人の面倒見てやらなきゃならない時代っていうのが長く続いたんだけど、最近は「自分で財布渡せ」っていうようにしてね。そういうふうになってきましたね。

現在は、ファミリーレストランでもね、けっこう、やっぱり店員教育してるみたいで、そういうこと〔＝店員による差別的な対応〕はなくなったんだけどね。

ある入所者（男性、1940年栗生楽泉園入所）は、1996年の「らい予防法」廃止、2001年の熊本地裁判決以降、社会の人びとの偏見や差別的態度はかなり改善されたものの、いまなお差別は残ると、つぎのように語った。

町へ行って、物を買ってもさ、「買ってもらわんでもいい！」って、こう言ったもの。いまは、そういう店はめったにねえけど、むかしはそう言ったよ。むかしたって、10年ぐらい前はそう言ったよ。店屋によっちゃあな。物を買に行ってもさ、喜んで売ってくれる人もあるしさ、ぜんぜん売る気がねえ人もある。「そこでうろちょろしてると、いいお客が入らない」ってさ。だいたいそうなんだよ。「あれがあるか、これがあるか」なんて聞くとさ、「うちにはないよ。そんなものはうちにはないよ」って。「帰れ」とは言わないよ。なに聞いたって「ない、ない」で、「ない」ですましちゃうんだ。なけりゃ、いられねえもんな。——草津の町でも、そういう店あったね。

まだ、いまでもあるな。おれ、去年かおととしか、〇〇へ行ったんだよ。温泉街で、まんじゅうを売ってる店があったんだよ。「あすこで、まんじゅう売ってるから、おめえ、ひとつでも、まんじゅう買って食べようか」なんて言ってな、行ったんだよ。まんじゅうあるんだけど、店屋の人、どっかへスーツと行っちゃって、だれも出てこねえ。「こんちは、こんちは」っても、絶対、返事しねえ。困ったからさ、職員の人に頼んでさ、「みんなで食べたいから、まんじゅう、ひとつずつ買ってきておくれ」なんてな、職員が行ったら、ちゃんと出てきて、売ってくれたよ。なんとも言わねえけど、出てこないんだ。〔その店員は〕35、6か、40ぐらいの人だな。やっぱり、そういうのはあるんだよ。なかなかうまい具合、いかねえんさ、シャバは。

ある入所者（男性、1952年長島愛生園入所）は、いまなお、療養所の職員のなかにも、無理解な職員がいることについて、つぎのように語った。

〔「らい予防法」廃止や熊本地裁判決でも、まわりの態度に変化はとくに〕ないね。このあいだ〔ある職員に〕「あんたらが、ようけ金もらうから、わしら公務員のボーナス削られるわ」言われたのが、ちょっと印象に残るね。そういう〔ふうに〕みんな受け取るとるかなあ、と思ったね。面と向かってそんなこと言うか！ それはちょっとな、と思ったね。〔でも〕外では言うとるだろうと思うよ。職員同士、そういう話、しとると思うよ。患者に向かって面とそんなこと言う人は、少ないけどね。その人は、そん

国立療養所入所者調査（第2部）

なに言うんだ。「あんたらがようけ補償金もらうから、ボーナス削られたやないか」言われる。出どころ、国じゃから、一緒じゃからね。公務員、だいぶ削られたやろ、ボーナスなんか。

地域社会でも、そういうあれは、よう聞くよ。「国の保護受けとるのに、ようけ、金もらいやがって」「ええ車乗りやがって」とかね、そういうのは聞く。